

「原産半世紀のカレンダー」

森 一久 編著

日本原子力産業会議（原産）創設直後から日本の原子力産業界のリーダーとして活躍しておられる森副会長が、一九五六～二〇〇一年の四五年間を半世紀のカレンダーとしてまとめた「私の履歴書―原産版」といえるものである。

原産の動き・国内の動き、海外の動き並びに原産の委員会活動や組織・職員名等を背景に、秘話としてその時々々のトピックスが掲載されている。

出来事、職員名等は原子力関係者には自分達の関与した業務、関係者を思い出させる懐かしいものとなっているが、勿論まじめなデータベースとして有意義・有用である。原産の重要な活動にまつわる「31の秘話」には、この際思い切って執筆・掲載した

とる 綴 活 動 ・ 組 織 の 総 覧 秘 話 の 31

という初公開のエピソードや裏話が綴られ、読者をひきつける。

そのひとつに、第二回国連軍縮特別総会での会長メッセージ「核エネルギーの平和利用による人類の未来のために」や第27回原産年次大会での「広島宣言」があり、絶えず世界の核兵器の廃絶・核不拡散と原子力平和利用の推進を根底に進めてきた原産の活動はこれからも堅持されなければならないし、そのための国際交流による理解活動にも一層の尽力が必要であることを改めて思い知らせてくれる。また秘話の中には、再処理に関するものが多く、いまのサイクル

事業の混乱は、当初の安易な海外依存の考えを、関係者が十分な議論のないまま進めてきたことによるものではないかとの編者の忸怩たる思いが窺い知れる。

さらに、「原子力文化」の語源にまつわるエピソードや、原子力が社会の信頼を喪失していった過程は、「原子力文化」の背景にある「基本姿勢」を貫き得ず、原子力界の一部が「安全神話」とい

『欧州レポート 原子力廃棄物を考える旅』

松田 美夜子 著

著者は大学教員で、生活ごみやリサイクル分野の有識者であるが、原子力発電廃棄物に関する専門家ではない。一九九五年に国の「高レベル放射性廃棄物処分専門委員会」の委員受諾をきっかけに、一九九六年から毎年夏休みを利用して、原子力発電廃棄物処分研究の先進地である欧州五か国（スウェーデン、スイス、フラン



ス）安易な説明に走った結果、と総括する編者に、原子力界の人々は応えていく責務がある。

原産の活動の広さと深さ、そして厳しさは、原子力界全体の先進の歩みでもあり、多くのデータ・秘話は、今後の原子力開発の進め方はいかにあるべきかの課題に対するヒントを浮き彫りにしてくれるものでもある。原子力関係者はもちろん、それ以外の人にも是非一度読んで頂きたいものである。（日本原子力学会事務局次長 垂石 嘉昭）

垂石 嘉昭

ス、ドイツ、フィンランド）の関連施設を視察している。本書はそれら各施設の責任者にインタビューした内容などをレポート風にまとめたもの。専門家でない著者が、専門家は肩に力を入れすぎて話すために、私たちの知りたいことも難しくしていると主張しているように、ここでは一般生活者にもわかる言葉で記述している。

訪れた主な施設は、スウェーデンの産業倉、エスポ・ハードロック深地層研究施設及び原子力発電使用済み燃料貯蔵施設、スイスの連邦原子力安全監査局、放射性廃棄物管理組合及び高レベル放射性廃棄物永久保管のグリムゼン地下研究所、フランスの原子力庁、低・中レベル放射性廃棄物貯蔵・保管のラ・マンシュ

く 易 知 心 者 に 分 かり 易 出 初 心 者 に 分 かり 易 出

センターとオープンセンター及び高レベル廃棄物埋設のビュール地下研究所建設予定地、ドイツの高レベル廃棄物埋設予定のゴアレベ研究施設と低・中レベル廃棄物保管予定のコンラッド研究施設、フィンランドの原子力安全機構、オルキオト原子力発電所の低・中レベル廃棄物中間貯蔵所及びユーロキ地区の使用済み燃料埋設地などで、多くの施設を精力的にまわっている。

特にインタビューで、原子力政策の仕組みや取り組み、国民投票と原子力発電廃止、使用済み燃料リサイクルとMOX燃料利用、低・中レベル廃棄物の貯蔵と保管、高レベル廃棄物の埋設と管理などについては、専門用語の多い説明になりがちであるが、初心者でも理解できる内容になっているのが良い。

欧州五か国の視察からわが国の原子力行政の取り組みについて、①国民に憶測されないようにすべてを公開する②国民に意見を押しつけるのでなく、共に考えて知恵を出し合う③行政主導でなく、急がずに国民と共に歩いて行く、などを提言している。（鹿児島大学名誉教授 松村 博久）



（社）日本電気協会新聞部 1,300円+税

松村 博久



（社）日本原子力産業会議 頒布価格2,000円(税込)